

# この度、「寺院しおり」をPDFデータにて掲載させて頂くこととなりました。

このしおりは、寺院様のご協力を得て寺院の成立から今日迄の歴史を探り、又、寺院の景観、本尊、諸仏像、什物を一冊の本にまとめたものです。

この「寺院しおり」は寺院様のご協力により**光陽美術** / (有)光陽フォト・オフィスが製作しております。

お寺の歴史は地域の歴史と密接に関わり、その土地や歴史を知る大変貴重な資料であるという思いから皆様にもご覧いただけるよう公開させていただくこととしました。

スキャンによる作業を行ったため、必要な箇所をお読みいただくに際し、少々取り扱いにくいものもございますが、何卒ご了承下さい。多少なりともお役に立てていただければ幸いです。

※ PDF ファイルのリンク先はネットワークの状況により予告なく変更する場合があります。誠に申し訳ございませんがPDF ファイルへの直接リンクはご遠慮下さいますようお願い申し上げます。

また、著作権等は放棄しておりませんので、掲載されている文章・写真の無断使用・転載などはご遠慮願います。

この「寺院しおり」PDF データは「**光陽美術** / (有)光陽フォト・オフィス」並びに「**いい寺.jp**」のホームページで掲載されております。

(有)光陽フォト・オフィス <http://coyo.jp>

寺院情報サイト**いい寺.jp** <http://e-tera.jp>



曹洞宗  
そうとうしゅう

月鷄山  
げいざん

高傳寺  
たかでんじ



## 開山と開基

開山は玉雛長運大和尚

当寺は遠州(静岡県森町)

掛川の雲林寺の法系にあたる。雲林寺四世劫外長現禪師によって宮古に華嚴院が延徳元年(一四八九)開山された。華嚴院は地元の郷士田久佐利氏の庇護をうけたが後に南部の重鎮楯山氏の帰依をうけ、かつ盛岡南部二代重直公の出世の地で幼育の場でもあった。華嚴院二世三月秀閑大和尚は盛岡市郊外飯岡に飯岡平九郎氏の庇護を得て長善寺を開創する。飯岡氏没落



山門



山号額、寺号額は中国の道元禪師が修行した天童寺の住職による揮毫。

後、斯波一族の帰依を受けて長善寺は隆昌の途をたどり、天正八年(一五八〇)又は天正十一年(一五八三)玉雛長運大和尚は月鶏山高田寺(耕田寺・高傳寺)を高田館の跡地に、祇管打座の場(禅僧が余念をまじえず、ひたすら座禅に修するにふさわしい場)として開山した。当時館の付近には真言宗の寺院として光栄山高徳寺があったが既に廢寺になっていた。又、長善寺の六世は盛岡市郊外滝沢に清雲院を、七世は盛岡市内に天昌寺を開山している。

長運大和尚は俗名高田等とい開基の高田吉兵衛の一族であったと伝えられる。



本堂正面



十三仏像

### 開基は高田吉兵衛康実

元龜三年（一五七二）頃、志和郡内部で百姓同士の越境問題が生じ三戸南部の南下政策も相まって田子城主高信（南部二十六代の父）が志和郡見前に進入。南部一族で覇を競う実力者・九戸南部政実が和賀郡に進出。南部軍より斯波詮直に和議の使者がたてられた。仲裁役は稗貫氏だった。その条件は

- 一、今後いかなることがあっても南部に敵対しないこと。
  - 二、占領された本宮館から毒ヶ森（南昌山）までを南部の領土とすること。
  - 三、和議保証の人質交換の代りに九戸政実の舎弟を斯波御所の掣とし志和に入らしむること。
- ということだったが、斯波詮直は一の項目は神文起誓であり名誉にかけて破るわけにいかず、将来は分らぬことであり約束したくなかった。二の項目は自分達に力がつけばいつでも奪回できる企みがあることから、二と三の項をもって和

議に応じた。

当時四十歳を越えようとしていた九戸弥五郎政康を入掣とした。その頃はまだ三戸南部は二十四代晴政の時代で後継者が定っておらず、九戸南部との決定的な亀裂は生じていなかった。掣入りの行列は南部一族の威信をかけたもので、先陣が斯波御所（高水寺）に着いても後陣はまだ北上川の渡舟場に居るといわれるほどだったという。詮直は弥五郎改め高田吉兵衛に高田村の三千石を与え、高水寺城の二の丸（吉兵衛館）を居館として遇した。その頃に高田寺が開基されたと思われる。しかし、斯波にとってはたえず南部の影に悩まされ、吉兵衛を冷遇し、ついには南部との約束を違えて実子を後継者とした。

天正十四年（一五八六）高田吉兵衛は豪勇な長兄九戸政実の下には戻らず、三戸南部の太守となっていた南部二十六代信直に走り、斯波を出奔してしまった。信直はすぐに吉兵衛を志和郡境の警備に起用、中野館（現盛岡市松尾神社）に付け、中野修理亮直康を名乗らしめた。



本堂内陣



開山ご真像 (中央)

### 斯波氏の滅亡後と中野一族

天正十六年（一五八八）七月、三戸南部は志和に出撃。高水寺城を攻略し、斯波詮直は秋田の仙北郡に逃れ滅亡した。その時の先陣はやはり中野修理亮直康（吉兵衛康実）であった。信直は修理亮に、「斯波を落城させたのはひとえに汝の大功なり」と称えて志和の片寄今崎城に三千石を与えて本城とし、郡山城の初代城代を務めさせた。

天正十九年（一五九一）、法領安堵によって南部七郡を得た三戸南部は豊臣勢七万とも十万ともいわれる奥州再仕置軍と共に九戸政実軍を蹂躪。ここでも中野の働きは目ざましく、信直は中野を三千五百石とし高水寺城（郡山城）城代とした。城は一国一城の秀吉の命により破却されている。

そのころ信直は津軽の大浦為信に同じく法領安堵により北の領土を分割されたため、不来方と郡山のいずれを居城とするか迷っていたが、秀

吉より不来方築城の許可が下りるとしばしば郡山に居て、築城奉行の中野と共に事を進めた。信直にとって中野修理亮は欠かせぬ力であると同時に豊臣七万騎を相手に堂々と戦を仕掛けた九戸政実の弟であるだけに、その力は恐ろしきを感じるほどであった。中野修理亮は、文禄三年（一五九四）四月、片寄館で従兄の九戸隠岐連伊に面談中（恐らくは兄九戸政実に敵対したことを咎められ）に切りつけられ二日後に死亡した。高傳寺に戒名、休庵知行禅定門の位牌が開基殿として残る。次男の吉兵衛正康はその場で九戸隠岐を切り殺した。長男の中野弥七康仲は中野館に居て不在だった。その後次男正康が遺領片寄を賜わり三千石、長男の康仲が高田の地を五百石で守ることになる。従って高傳寺はその時以降高田弥七康仲が父に代って開基家を継ぐこととなった。康仲は慶長十七年には田村淡路と二人で見前村、徳田村、高田村の合計千四百石の蔵入地（南部直轄領）の代官を務めている。

この事件について南部家秘中の文書（祐清私



庭園



普賢菩薩 本尊：釈迦牟尼仏 文珠菩薩

記)によれば、(中野修理亮は大力無双、常に太刀を腰につけ、三戸城石垣の三十人で動かす石が転んで来たのを杖一本で受けとめたり、雪の中で信直公が狩をしていた時に、追いつけるか、と言われた公を、あっさりと手取りにできます、といい組み伏せてしまったりしたことがあった。

南部初代の利直も父と同様、修理亮を野放しに出来ぬ、として毒殺を謀り、行きがかり上、野田内匠守(野田城主)と自らの嗣子彦六郎家直を巻き込んで酒宴を行い三人を亡きものにしたという。それが慶長八年(一六〇三)正月十八日でその二日後修理亮は命を落した。前世の因果といえばそれまでであるが浅間敷次第であるとの風聞が流れた」という。

その時に何が生じたのか今では知るよしもないが、中野吉兵衛家は四代行信公の時正康が家老となり南部の御三家といわれ、以後南部末代まで代々家老職を務めている。

## 南部公と高傳寺

### 南部利視公苦難

初代中野吉兵衛と信直公以来、南部にとって志和郡下を治めるためにも中野一族は欠かせぬ存在だった。従って高傳寺にとっても中野

(高田)氏と南部公は大きな関りをもっている。

七代利視公は享保十年(一七二五)十八歳で家督を継いだ(家督は宝暦二年五月一七五二年迄)。後見は家老の中野吉兵衛光康であった。その頃南部藩は元禄の飢饉(特に一六九五・一七〇二年)と千九百戸余りを焼いた享保の大火(一七二九)で疲弊の極にあった。中野吉兵衛は先代の利幹公が任命した財政立直しグループを更迭し儉約令を反古にした。利視公は「公、年壯にして学を好まず、家を継ぐに及び益々放恣にして、常に子弟を集めて金錢を賭して射的、角力を試む……」(中野吉兵衛は五代信恩公未亡

人浄智院の寵愛をうけ大奥に出入りのみし……)というあり様だった。公は東徳田村に三御屋敷とお貞様御領の計四百五拾石の蔵入り直轄領を持つている。新御屋敷、中御屋敷、角御屋敷にはそれぞれ、八子、十二子、十子に給したときれるが、一説には寵愛する稚児を置いたともいわれ、又、お貞様は利視公の妾腹の子で醜い方であったため高田の郷士に持参金(二百石)付で押しつけた、との説もある。南部家御領蔵ではあったものの中野吉兵衛が関与していたと思われる。

又、江戸表では利視公は増上寺(盛岡の浄土宗大泉寺の本寺)より二千両を借用したが、返



開基 高田吉兵衛殿の位牌

済できず僧侶八十名に出勤登上の駕籠をとり囲まれたり（駕籠訴訟、延享元年（一七四四）、老中松平左近将監の嫡子豊前の守にあきらまれ、利視公の女掣牧野惟成丹後田辺藩主の諫めをうけたり、帰国費用にすら難渋するところだった。自ずと年貢増徴、商人より御用金を臨時税化、二分の一の減体を行うなどをした幕府より大江川普請一万両を課せられ困窮した。江戸詰の家老も自殺に追い込まれている。前利幹公の「かわらけ切腹事件（享保八年（一七二三元旦）」もあり、南部藩公は江戸のもの笑いの種だった。

しかし、ようやく気付いた利視公は次々と改革と儉約令を発し、まず家老中野修理を罷免、伊達藩との交流で手工業導入、目安箱設置、開田自由策、灌漑用水敷設、南部紬・南部下駄・口内傘など内職・工業特産物奨励、金山開発を行いやがて利視公は南部の名君といわれるように変身した。

〈郷土史事典（昌平社）・南部盛岡藩史略（大正十三造）・矢巾町史〉

「やまするな」とひどく憤りなされている、と告げられた。仁左衛門は、これにより観音様に謝罪するとたちまち病気が治ったという。余りにも恐れ多く、高傳寺にその木像観音像を納めた、という。

安永の頃火災があり本堂、観音堂とともにその観音様も焼けてしまった。安永四年（一七七五）新築された時、南部公より下賜されたという青銅の観音様が東徳田の川村仁左衛門氏より寄進された。堂前の手洗石にそのことが刻まれ

## 十一面七つ子観音菩薩

南部の祖は源義家の兄弟新羅三郎義光とされ、その守り本尊の観音菩薩が盛岡城内の稻荷神社に祀られていた。利視公は鑄造師小泉仁左衛門（盛岡城の鯨を作っている）に命じて唐金（青銅）で仏体を鑄させた。公はその像を改めて神社に納め、古い木像は小泉仁左衛門に下しおかれた。

仁左衛門は内仏堂に安置していたが、ある時子供たちが木像の首を玩物として遊んでいた。父母は叱り、とり上げて安置奉祀したが、その後家内の者達が相煩い良薬も効かなかった。祈禱しご神託をいただいたところ「子供と楽しく遊んでいるところを取り返し、予が遊ぶところをじ



川村氏位牌



川村氏寄進

ている。この像はかつて小泉仁左衛門が依頼をうけて作った像と同じものなのか分らないが、川村仁左衛門家は源頼朝公よりこの地を賜わった河村四郎秀清を祖とする郷士で四百年の歴史を持ち代々仁左衛門を名乗り、ことあらば剣をたばさみ、五百の郎党を率いる、農に励んでいる一族で南部公も一目を置く家柄であった。その末裔の仁左衛門氏は当寺の檀家総代長を永代務めておられる。この観音様はさらに、病平癒の仏として広く霊驗知られるところである。

平成三年四月、火災により本堂、本尊も焼失したが、十一面七つ子観音は現住の二十四世泰明住職が運び出し難を逃れた。

平成五年、近代工法により本寺長善寺より本尊を迎え落慶している。観音堂も焼けてしまったが佐々木久蔵氏より新たに寄進された。唐金の十一面観音菩薩様は変らずに慈光を湛えている。



十一面七つ子観音像

## 大鐘鑄成の由来

宝暦十年（一七六〇）七月、南部利視公の息女愛子という方が（江戸の）南部の御屋敷で亡くなった。牧野豊前惟成と婚礼し七年目で二十五歳の時という。遺言に「妻が死にたる後には、これらの簪、円鏡は、郷里南部領の村の寺、大鐘鑄成の日、その材料に」と中野吉兵衛に託した。宝暦十二年、高傳寺の大鐘鑄成の日、遺品を混入して大鐘成り、大姉の仏心鐘にこもって衆生を募くことになったという。

大鐘の銘には次のように刻まれた。



草駄天像

十方信施 十方に信を施し  
不日円成 いつの日か悟りを聞くよう  
華鯨吼破 大きな鯨が吼えるように  
幽冥之昏衛 夕暮の道に響きわたれ

その時の住職運秀大和尚は大姉の厚志を崇び、位牌、真涼院殿晚暮清月光雲大姉の戒名をおくり高傳寺に今も祀られている。しかしその時の大鐘は第二次大戦の時に供出されて今はない。

お貞様、愛子様、牧野惟成殿と名前と由来は伝承によって異なるものの、当寺と高田（中野）一族、南部利視公とは何かの深い由縁があったものと思われる。



おびんずる様

## 女流歌人松本つやのこと



松本つや句碑

つやの父は当寺二十一世高田蘭英大賢大和尚、母サンの娘として明治三十一年六月二十日高傳寺に生れる。つやは療養中の俳人松本たかしを

看病し、やがて妻となる。たかしは高浜虚子の「ホトトギス」の同人でやがてつやも高弟となる。戦時中、つやの妹うめの嫁ぎ先、石鳥谷の広済寺に疎開。たかしは俳誌「笛」を創刊する。たかしの死亡後、つやが継承した。昭和五十八年死亡。句集「春蘭」「野茨」がある。

当寺境内に  
恐ろしく ゆるる橋なり 秋の川 つや女  
の句碑を平成十一年に建立した。  
広済寺の門前にも松本夫妻の句碑がある。  
村人にならない 暮らしぬ 吊し柿 たかし  
交わりや 春蘭揺りて くれしより つや



俳人 松本つや女生誕之地

## 女優 宮城千賀子の墓



盛岡出身の女優宮城千賀子（本名佐藤ユキ）は大正十一年に生れ、昭和十一年宝塚少女歌劇団入団。昭和十五年日活

にスカウトされ、吉川英治原作・稲垣浩監督「宮本武蔵」に武蔵の恋人「お通」役で華々しくデビューした。その時吉川英治に「宮城千賀子」の芸名を付けてもらった。昭和十七年、「歌う狸御殿」で男装の麗人を演じ、伸び伸びとした柔軟な演技を見せ、戦時下の観客を魅了し代表作となった。その後、嵐寛の「鞍馬天狗」等に出演、昭和三十年以降は脇役に徹した。

平成八年八月七日、盛岡市内の病院で死亡、七十三歳。徳田村（現矢巾町）初代村長だった祖父佐藤八代助の菩提寺高傳寺の佐藤家の墓に納骨された。



女優 宮城千賀子の墓

## 寺宝など

- 山号額、寺号額 中国浙江省寧波市にある天童寺の明暘法師（中国仏教協会副会長）の御揮毫による。天童寺は道元禪師が修行した寺で、中華五山の一つに数えられる名刹である。平成四年高傳寺再建の際、町と寧波市との交流の縁で贈られたものである。
- 十六善神軸 数百年前のものと思われるが、作者、製作年代は不詳。
- 十三仏像。
- 十一面七つ子観音菩薩像 前述。
- その他諸仏、諸軸。



羅漢像軸 観音像軸

## 現住職 高傳寺第二十四世 高田 泰明

〒〇二八一三六〇一  
岩手県紫波郡矢巾町高田二十五十三  
電話・FAX (〇一九) 六九七二二二四



\*表紙は観音堂と経蔵、裏表紙は戦没者慰霊平和観音。